



関ヶ原軍記

初編十三

十四

遠13
2207
7



特
門八遠13
種
2207
卷
7

池清

関ヶ原軍記初編卷之拾三

目錄

一 石田三成伏見城は近也む事
 并 神君石田三成救ひ給ふ事
 一 石田三成智略は病と見せて
 徳川家此終はと欺む事
 并 神君石田三成智と威の事

翻 譚 書
 倭 軍 書
 唐 軍 書
 隨 筆 物
 國々名所
 近世戦争書類
 右々外數品は應比書は晚々程奉答也

繪 本
 書 本
 滑稽物

曲亭馬琴之作
 其外諸先生作
 軍書
 敵討
 諸家騷動
 御捌物

書物價目表

東京牛込細工所

誠光堂 池田清吉

池清



関ヶ原陣記初編卷之拾三

石田治部少輔依見の城へ強迫む
事

并 神君石田次致ひあり事

曰く石田之次孫畠と成りて
依見へ来り
家康公次致ひあり事

御徳代元封果さんさんども
首く 御降宸形く石田城
以めくやひある形く七將の面く
伏見へ来り三城を乞ふ中頼
ありあらんども

神君清見ある和明の
以扱ひありその後石田城取替
して依和山へ懸る居るべし

このころあり三城の城を懸
混む時へ来居降左近軍法
城況く合戦を乞むるといふ
昔依竹が果見くくつて三城
依和山に懸る居るお極やうり
神君乃降下知くして石田城
城 作身なるなり

凡そ謀畧をそのまらし

考て細細と云々酒の
下戸あり振舞の法度也
と云々喜信を申す不
者一丈五尺云々毎朝毎
日毎物とも毒雨を以て
人足の新色と云々牛乳と
定められどくさくわくわく
きも難儀して徳用の度と

さておき換金此かへさ
ある本頼りに各入り個略
してその子の存け人の考へ
くつろがね志する人
智恵といふものわきま
まゝのまゝ人足仲間者
在肉院とて仲居の喧嘩は
揃へく場所のさぬとげと

見するゆへ人足がその棟梁
出く各扱あつてその
後初志のまゝに
小屋に居る在りとの
りてあつてあつて
下さるべしと解つて
在りたる場へり不届の
の在りたるはれはるは

ありとらつちこの喧嘩は
物れりむくると人足は
おきて来て彼を
の中へ突入し衣類を
備へ小中でも泥を
千ありとらつちこの
百ありとの半略人
走り来りてるれはる

るるり下席ゲカ有るぬぬ附つと
お手とも知し色いろがが一一是こゝ
時の不幸ふくありり中ちゆう小せう庭ていは
所ところ入いるる一一とといいわわすすの
事ことりり人ひともも部ぶ派ぱどどけけを
をを解ときき一一毛けゆゆくくききん
とといいわわすす又また中ちゆう毛けゆゆくくききん
印いん受じゆああくくとと真まんんるる人ひと

か人ひとのの子こ速すみ急きゆうもも時とき
彼斗略たにりやく人ひとのの急きゆうくく用よう急きゆう
この事ことあるるをを彼人たにりやくのの定ぢやう級けい
身みのの衣い類るいおお織ぢゆう大だい小せうも
名な掛かくくかかああのの後ごに
そのと部ぶててこれこれのの松しょうが
つゆつゆくくくくああけけををいいわわす
あらが差さしし中ちゆうああののととててすす

いづこへ又は釋しやく色しきしつらふさ
洗せんくく絞しぼくは大小たうせうをば揃そろく
束たもとしややきさるりまやうで
南なん方の肉にく口くち袖そで塞ふさげろと
きし出いしりりり被お人ひと稍ま短たかの
きんぶとららきこののと記しの
うきししこのつゆりに扱あく
浮う切きぬるるう入いき横よこ是こ之の

と乳ちの八百やうもいふく中ちゆう積せき
心こころの肉にく干かん挽ひくび是こより
念ねん煩ぼんくぬりて毎まい粒つぶく
人ひと是こ揃そろくの時ときくまりても
強ちやうく乳ち明めいとぬるる同どう
人ひと決けつ之こ反はんを既すで身みうく
ぬ百人ひゃくにんのこままりく
二に二に百人ひゃくにんももとと念ねんせせ

調景——子孫の廣太の
徳分ふ名符より内務の及
まじくも初より車るれ
ば智徳やど忠海——と相
り——石田云成る節及と
まじくも初より車るれ
見極めて強しと云く——
いり——の智徳をよふし

流石此井伴本多 柳原
本程其節の徳大おきも
たぐ——と云ふ名成の
之成思り——ま智徳の留
あり

去程も交長四年四月二日
河津部お捕之成る
家康公の御鑑は走り也——

ちや新を明らるるありあ
良内玄冥かみんのりて井俾しん柳
系しんのめんくく対面たいめんはる
よとりのり共々人々来り
しゆくのねく不審ふしんと立る
大青おほせい銀ぎん舟ふね中ちゆう立食たちく本ほん多た休きゆう後ご
ちあぐ対めんはる時年三歳
りりるの如藤是回漢邦

池田 福勝 細川 如友 嘉明 等
のめんくく一味くく
此次しん来きて系しんと糖やまうちく
まぐまとのののぐれさる変ま
古今 嘉康公城このみ
ちららのちららり此法しほ殺ころひの
ねぐひねりち方かた以も融と混ま練ね中ちゆう
うけたり一級とわ悟さとゆり

多ぶまゝあれをなす候
御高免有て編り御分抱を
御ひまると志初く
中られれば依後さる何事もせよ
此御預の趣きと中山とく
子年世後を 御前には披扇し
りわに 家康公の
誓くく此工又あつて大坂古

追人あつて
一工又く対めん
有く己の刻やで御料理出
て石田の体息は御席併井本
多柳平太二将中
さる心の中あり
奸乃逆穢なり急ぎ
討果はと
小書院は通
御前には披扇し
りわに 家康公の
誓くく此工又あつて大坂古

とりの丸 家康公も嘗て
御内心あり 句端 御長年の
時より 投擲く人乃 彩ゆ中
物事 御所をいきて 丈夫
平田園ひある事 こん 徳人の
志らとともあつ 知りあつて 討討も
作有りの今 三度 夏 又 此 意 所
那くして 家康公 執 執 事 来る

此らの大悪人 元 今 日の 又 替 人
そて 降参 是れ 大悪人 たり
免 洋 是れ 是れ 夏 是れ 夏 是れ 夏
と 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
對面 せん 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
家康公 執 執 事 来る

古太閤の義長一して依和山の
城より一りきし又幸行の隨一
りて秀頼を此後あり南村
詮人より一も私一の義意
ありて一折果も一まるの布意
ふあ一ゆ泉来者も一お心
地石田を因ひ一篤一三
故一依尼の屋敷一入る一とぞ

評せりり

石田三成智略信病と見せて
徳川家の徳長と欺く
并 神君石田が智を感下の夏

時千石田三成中の唯今の
作せ冥加一お叶ひ一有難
次更るり志一拙者此屋敷に

雷の鳴りもおどろき震して
只童子れどくあり心を智れ
ありのたも不詳がりけり病
の石田う那渠が心度今を
武士らしくもねのひし
女子も常りし石田うねを侮
里たり井俣柳系るども知し
あがりまゝるゝるあざりり

あうるに三車その中ヤに小使せうじん
あかりらるとまゝあやうコウ危あいで
んとすん芸暗終まがまゝ産敷を
通る車叶日ん坊ぼう主しゅ流りゅう越えつ頼たの
てて手燭てんしやくを扱さ七人子しち子こ越えつ
りまゝくけりらあそまゝる
に不ふ通つうれ大だい橋はしぬけあり
此こ時ときくくそ井俣柳系いゑりゅうけい娘むすめ

とて実東の徳大なるを
徳士才も大なるを以て
さすといふ石田を生ね能病あり
と見くよりこれやぞい人が
くおのひらけ薬が分際そ
何やどの軍法調畏はら中も
大概知きとら事なる人の
づらひるいと末とやぞも悔り

たりこれのどくにして
石田を徳人のとらとせら
しと大ひるる志ありて
心慮をせらるる者あり
さすは付井伴直政 御前へ
出く石田の形のごとく
能病ののよるごとく
女とく此如くことやらる

家康公是誠實にして威あり
石田三成は利を思ふ源ふりの
とりの名にござりしはさきく
はさきくはまのん度此りのあり
直政を能くしるるあり
日本を是利するは謀略する
とよの良なる平均の折は
此田捕の所とも
朝敵

て一途や久しこのち
為成は能病軍の物語りも
娘の也その雷なり名れ地
震おとす終ふ一ツとして雷を
おくえおをぬき有様之これ
全くと謀斗しそ有と義貞
はさきくはまのん度此りのあり
ひさし悔なりするは所の役も

くさざる人として常く悔どり
物事一尊成落らむ時先道人
近月仕る根えきとて義貞の
悔らるる愛く所り果して
も大人の利を好むなり
又唐古より蜀の劉岐玄德を
魏に國つれ邦のてり
此指とて人の世と安堵るなり

一めんを急くせく大ひるる
徳略はまよとの中心今此三奴も
是ふ月ど扱る名所も奴こと
感ドぬあとのた束これ表侍お
る大ひふ悔どり一が果して
翌年國ヶ束此大邦を起し
存り世に石田あり

油漬

實ヶ束軍記初篇巻の十三終

池清

関ヶ原軍記初編卷之拾四

目録

一七將

徳川家^{とくがわ}は使者^{しや}の事

并

神君^{かみ}佐^さ極^{ごく}ひの事

一石田三成

緒^{つひ}將^{しやう}子^こ會^{かい}合^{がひ}の事

并

上^{かみ}松^{まつ}佐^さ行^{ゆき}の意^い可^か

後^{あと}上^{かみ}事^{こと}

池清

関ヶ原軍記初編卷之拾四

七將しちしやう 徳川家とくがわ 一仗いちぢやう 考かう 跋はく

立たちちのの事こと

并なびび 神かみ 表あは 内うち 扱あひひ のの 事こと

去き 河が 邊へ 小こ 大お 坂さか 下した 七しち 將しやう の

ああんん 評ひやう 漢かん 一いち 行ぎやう 中ちゆう

石いし 田でん 邊へん 下した 中ちゆう 伏ふく 見み 一いち 途と 切きり

家康公城たるのみ寺をてやう
うささうの追強く討果さん
とかせらんきし手勢と僅
一万余騎をて俄打立
伏見一柳つあく
家康公七将のめんくより
仗忠城のくくしけら
石田三成が故を圍以東奸倭

をを向て徳言をうぬその
ふ力とあつあ動乱は仍
てそのうび討果さんとさん
せーとさあ

家康公城たるのみ寺をてやう
うれをゆめくさひぬさん
うけうぬら去那く渠を
是れく四日く下されゆ振

うらむりつ 送る時

家康公の御返言を右衛門地
界後いさふ君も無事にな
れぬの危も何色めん
御初年ころ秀頼茂る
石田とうちをいせんとの用意
を以ての御する秋修の妙法之
三秋き又春の随一として

先き秀頼の寵信より刑罷

あゝんとするは評定一変の上
ころべし 予と頼と来り

ゆゆき竹分見するが
追々おつらひ中まへく山糸

軍勢を心引きられぬその
ゆるりこの時七将をらん程
子あつちころふ

肉府公の口舌扱ひあねがて
そのまゝに手とむる
致さん事い基ぶせんねん有り
と懸混さるゆ指唯うのうら
時 肉府公清いつりあつ
くまねく 邦入らう懸
まわりのうらるる能もる紀仕
合せ有りは 家康越頼

来りゆと事下へおのく
日一ヤガ一そ能く討果
えんとせららるるおのく
方一 家康首く是眼の
これるくはた三故と一ツ
故く一執をいし次又ま有り
手づらく 邦入色られ
子の 作せよ七得も是能

あつ 家康公一討て
合戦 是くまのり 城ふの
志をくく 軍急 城の中へ
去りて 何れも 殺さず
衆と 皆一に 逃げられ
居りし 所も 石田の 安
あんなる 衆を 越く 山 越 西へ
大坂は 降りたり 衆良

家康公より 云ぬ
うまい づの びの 軍 止
うり 統 び 考 度 乃 手 勢 大 坂
居合 せ ころ の 者 と け 依 見 長
ふ び なる 自 分 此 居 ころ
引 去 る 人 の 所 へ 景
あり ころ して 三 城 へ あり
頼 ころ あり して 流 下 知 入 隠 山

りりららてその人々和勝の
清取扱ひの事やまの由らる
を室や子強夫 神君之
あゝぬとらるる由かくまひ
有しと徳人これを感じて
その時柳原 井原 本多
内及るるび千松平徳使も同
く主殿物 成瀬 安房次始也

とてその邦に御簪代流迄
強く由練云とりくくく
そのく石田の事おるど由
能ひやうくくひ弓矢の義
理もそのそれの人千くを考
るるるれ樂々大奸倭の者
よそ徳人の志とらるるあり
其く石田の法敵あり願ふ

七人乃利運なりまうせて已い了り
さん車くるま三威さんいの危あやも角かくを日ひ東あづま
徳大名とくだいめいの奈なりつりくして己おのれ
城しろをありて家康いえやすが武ぶ
威いを忍しのむ心こころして一戦いっせんとぬり
むゆくくと一臺いったいして秋あきやうと
まらぬりの家康いえやすが武ぶ
威い深ふかく斬きるるあり今いま扱あつかふは戦いくさ

入いるまくくららがら記き録ろくしては必かなら
むは後あとも予よと悔あはれらるべし
心こころまゝ石田いしだを固かつて初年はつねん此こゝ秀ひで
頼政たのまさ立たて予よが真まことん城しろ見み
まら此こゝ理りありと作つくせられ
は柯かのくくのの御ご治ちせ戦いくさ
承うけたまり何なにも感あれたなり
りさんさんんん家康いえやす公こうを

格列の 名一頁を列らね
後法扱ひ有也

石田三成 徳おと會合の事

并三城 上杉 依井の事

後より

徳も 徳川家康公も古今

無類の御意帯して申村教部

少博 生島雅楽及とありて

七人の荒大名人 作

うれりらのおのくれぞん

ありもさるるやまの事あれども

兎角新解の沙汰を以て

味決とくくやまの事あり石田

の古を圖の相伝あれを今討

果さ人も理よりべし

石田の申入を切りの役とせし
をりして隠居致さず依和山
小整居ありしめ嫡子隼人
正大坂平有く役目と見せし
ゆやしよ
ひやいひの曲くおんぎん
千波さんよさるりよ
作られし七人の西も

家康取扱

是飛平及ぶん
家康公治扱ひのくも急も
角もはるべしとて志のあり
りぬ 内府公も志申村
生駒の友人をゆりて石田
三成へ 信入られりぬとび
を降る大坂よあつて又
赤井の内よあらせて天下

此終動止時那^ら竹も秀頼
の清くあつれを佐和山へ
隠居するやさるあり以子息年
人西のり 家康指南
あり 家智も長く 以素時
爺と兄をせ奪け役とつとあ
さ清くさるあり 以成るさるく
隠居する一とありあり

石田元さるそのあんなは恵可
清清やさん 作下さん
おのむさるあり かくはと
一旦所交のく彼と中
より 支使を帰してを後
くさるあり 返して
作入るさるあり 以成る
別して右園の以送るもさる

表へあつかり評定しける
千ノ松原此を直江山城
の兼く石田と合評あつんを
急務主人の代つてまゝみそ
急角子のくびり
徳川屋のあつらるるに任せ
さしつゝ佐和山へ下るゆへ
又至人系掃子なりて國

りし此おしりゆきみまや
この十日やどよの高地を立て
國へ下るゆへに東を
是れを登るべしその時附彼
少尉人を定めし
徳川屋大軍をりりし發向
あつしそのせり子のぞ
んで佐和山よりおておく

まゝとらんれ秀頼公の威
先をたのむく物も大名と
—合せ関東にせり下りぬ
な—その時を冥途にた
の勢子とてぬきく滅す
へまとの調畧を急ぎ討ち
がやとてあり志すばさ
そく佐和山へ討ち入りぬ

な—その時を冥途にた
ゆふ時を時友近をみ出
なぐりりるが主人共今
佐和山は執事等の威を
うとて入る所の内を
まありんを権を失る
破る良好ありその武
あく—その徳人下知り

まじり 品大坂よりく竹とあうく
和膳わだんのまじり 居るらやうし
それか
徳川どのへ
湯使若りまらへ 子あうりと
この飯屋いひや太の利りし
奇斗きうあり 時と竹行たけゆき最室さいしつの
いさくや
徳川どのと斗
板

んちりりるあまじり 殺あえ
本水戸ほんみづへ 体是たいしより下り
志う色ば上粒じり赤とあう河を
合せてまじり 越上へ 妻あり石
田どのの上うへ方とて 徳畧とくりやくとあ
あひ 徳川屋の徳と追お
新玉しんたまへ 竹たけとれりし
と上粒と竹たけ赤あかりひぶん

三版も何んしきありち
く相承人太極古伝と以て
使者とる

徳川慶の如符んごう此ごん
かごけりる子次貴うくい
あつうひ此おのむまのそ
均等り美獨由何ちやふと
以返言く及びたり

油清

冥々原軍託初篇巻の十四終

油清

